

●コレクション・データ

時代 弥生時代 前・中期
調査 唐古・鍵遺跡第 89 次調査 (右上)
第 20 次調査 (右下)

発見年 石弾(右上)2002 年、土弾 1985 年(右下)
大きさ 石弾(右上)長さ 4.2 cm、
重さ 55.7g



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション

40

投弾

今回紹介する資料は、武器や狩猟具と考えられる「投弾」です。写真上段の球形の「投弾」は石製、下段の紡錘形は土製で、前者は「石弾」、後者は「土弾」とも呼ばれています。このような「石弾」は、長さ 4.5cm、重さ 65g 前後の自然の円礫が多く使われました。

これまで日本では、「投弾」の使用法を示す出土例はありませんが、ヨーロッパでは投弾帯とセットで使われたとされています。投弾帯とは、「投弾」を包んだ袋の両端に、1m 前後の毛糸や皮革、植物繊維製の紐を取り付けたもので、腕で投弾帯をグルグルと回し、遠心力を利用して「投弾」を投げたと考えられています。

弓矢の射程距離が 90 から 170m であるのに対し、「投弾」は 200m 先の標的に命中させることも可能でした。また弓矢に比べ準備も簡単で、天候の影響も受けないことから、騎馬戦が出現する以前には武器として発達しました。

一方、東アジアでは投弾帯の存在は不明です。ただし、スウェーデン民族博物館には北朝鮮北西部で採集された投弾帯が所蔵され、かつて東アジアにも投弾帯が分布した可能性を示しています。また、日本や中国、朝鮮では、合戦を模して石(飛礫)を投げ合う「石合戦」と呼ばれる習俗が知られ、素手で「投弾」を投げ合った可能性も残ります。

弥生時代の「石弾」は、防御性が指摘される高地性集落で出土する事例が目立っており、武器の可能性が指摘されています。一方、ラグビーボール状の「土弾」は、狩猟具として使われた可能性も高く九州西北部のものが弥生時代前期にあり、九州から近畿への弥生文化の波及を示す資料とされています。

ただし、中国・朝鮮半島では「投弾」について明らかでなく、その起源をめぐっては検討課題を残しています。形態が単純な資料だけでなく、その位置づけに関しては問題が山積みです。

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前 9 時～午後 5 時 (月曜は休館)
観覧料 (カッコ内は 20 人以上の団体料金 / 15 歳以下は無料)
▼大人 2000 円 (1500 円)
▼高校生・大学生 1000 円 (50 円)

ミュージアム上面図と展示位置

